



日本国際飢餓対策機構 (Japan International Food for the Hungry: 略して JIFH) は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体 (NGO) です。1981年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人財育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合 (Food for the Hungry International Federation) の一員として、18ヶ国60の協力団体とともに、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、現地パートナーと協力しあって、「こころとからだの飢餓」に応える働きをしています。



日本国際飢餓対策機構

2012 No.260

3

飢餓対策News

海外で活動を目指す方のために ハンガーゼロ・ファシリテーター・ トレーニング

(旧称 オリエンテーショントレーニング)
当機構を通して海外パートナーとともに活動を希望する人や、国際協力に関心をお持ちの方々のための学びと準備の機会です。ご参加お待ちしております。

日時: 3月19日(月)~22日(木)
会場: 東京基督教大学 (TCU)
千葉県印西市内野
費用: 25,000円
(テキスト代5,000円を含む)

定員: 12名
お問い合わせは...
東京事務所 ☎ 03(3518) 0781
福地まで。

里子訪問ツアーのご案内 フィリピン・バリバラン地区

日程: 5月18日(金)~21日(月)
参加費: 10万円

フィリピン・バリバラン地区の里子を訪問します。5月19日には同地区のクロージングセレモニーに参加予定。問い合わせは、大阪事務所まで。

ヘオルンヌリ希望のコンサート

東日本大震災復興とハンガーゼロ・アフリカのために、韓国の音楽グループ「ヘオルンヌリ」によるチャリティーコンサートが、3月から4月8日まで、東北の宮城・岩手、関東の東京、神奈川、埼玉、千葉など28カ所(予定も含む)で開催中です。近隣にお住まいの方は、是非ご来会をおすすめいたします。各会場とも入場は無料、支援のための募金が行われるところもあります。日程はウェブサイトをご覧ください。

ハンガーゼロ・サポーター大募集中!

今すぐ▶▶▶ 各種支援の お申し込み ができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類等を送らせていただきます。
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

- ☐ ハンガーゼロ・サポーターとして協力します。
毎月()円 (1口1,000円)
- ☐ チャイルド・サポーター(世界里親会)になりたいので説明書(申込書)を送ってください。
- ☐ 海外スタッフ・サポーターとして協力します。
毎月()円 (1口1,000円)
- ☐ JIFH(日本国際飢餓対策機構)サポーターとして協力します。
毎月()円 (1口500円)
- ☐ 郵便自動引落し申込書を送って下さい。
- ☐ その他の銀行自動引落し申込書を送って下さい。

フリガナ
氏名: _____ 男・女

フリガナ
住所: _____

(電話) _____

▼申込日: _____ 年 月 日 ▼

FAX・072-920-2155

パン・アキモ
フィランソपी
特別賞受賞

2月16日、日本フィランソピー協会の第9回「企業フィランソピー大賞」贈呈式が東京都内で行われ、当機構協力企業のパン・アキモ(栃木県那須塩原市)が特別賞「パンが運ぶ共生賞」を受賞されました。この賞は企業が本業を通じて社会の問題解決に良い影響を与えたことを顕彰するもの。今回は、パン・アキモが独自に開発したパンの缶詰を緊急災害被災者や世界で飢餓に苦しむ人々に供給する「救缶鳥プロジェクト」が評価されました。このプロ



ジェクトは、2010年のハイチ大地震や東日本大震災における当機構緊急支援活動でも迅速な支援につながりました。秋元義彦社長は当機構のハンガー・ゼロ特別大使であり、当機構としても今回の同社の受賞は大きな喜びです。

ハンガーゼロ・サポーター 1916口。さらに運動をひろげていきましょー!



森祐理親善大使・南三陸&仙台コンサート(2012年2月)



仮設住宅訪問ボランティア・亘理(2012年2月)



JIFH復興カーペンターズ

ホープみやぎ・ボランティアセンター

私たちの教会は被災地にある田舎の教会です。44年前から始まりましたが、町のほとんどの人達に何の注目もされず何の期待もされずにいました。ただ日曜日には教会員たちが集まり、礼拝を毎週忠実にささげてきました。ところが昨年の3.11に東日本大震災が起こりました。私たちの教会では建物の被害は少なかったものの、沿岸部にあった6家族の家屋が津波によって大きなダメージを受け、そのうち5つの家はもう住むことが出来なくなりました。その2つが「家の教会」でした。これらの家族のためと被災者支援のために「ホープみやぎ」という復興支援プロジェクトを立ち上げました。

大震災後、JIFH(日本国際飢餓対策機構)は私たちの教会に食料品、水、毛布などの多くの支援物資を届けてくださり、教会はそれらを地域の人々や被災した教会員を通して、できるだけ行政の手の届かない所に配布してきました。教会はそのうちに地域の人々から注目されるようになり、今に至っています。

教会は愛の共同体ですが、どちらかと言うと私たちの教会は内向きでした。それが3.11によって外向きの教会に変わりました。またイエス様が弱っている人や貧しい人たち

に注目したように、教会が地域の人々、特に目立たないような方々に、支援物資によって愛を届けることが出来たことは幸いでした。もう、あれから1年、表面的には町は震災前に戻りつつあります。しかし、被災地の現場ではまだまだ復興には程遠く、仮設住宅や借り上げ住宅に住んでいる人達、特に仕事を失った方々や年金暮らしの年配者は1年先、2年先が不安でなりません。

「ホープみやぎ」はそのような方々に物心両面のサポートをこれからも続けようとボランティアセンター建設に取り組んできました。昨年の7月から

業者をお願いしていましたが、ようやく今年の2月に完成しました。平屋で49坪のプレハブの建物です。半分は倉庫、半分は男女分かれた宿泊部屋で各々10名位宿泊できます。そのためにJIFHも様々な応援をしてくださいました。

私たちには被災者がいるので、被災者の気持ちがかかる教会として、これからも「ホープみやぎ」の働きによって被災した方々に寄り添ってまいります。皆様の祈りと支援に感謝します。

塩釜聖書バプテスト教会 牧師 大友幸一

同じ被災者の立場で寄り添う

1分間に17人(うち12人が子ども)・1日に2万5千人・1年間では約1,000万人が、飢えのために生命を失っています。

■発行者 岩橋竜介

■発行所 一般財団法人 日本国際飢餓対策機構

Webサイトアドレス <http://www.jifh.org/>
eメールアドレス general@jifh.org

■募金方法 ※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウェブサイトで

身近に
便利に
なりました



●郵便振替 00170-9-68590 / 日本国際飢餓対策機構
●他の金融機関からの自動振替 ●クレジット、デジタルコンビニ

大阪 〒581-0032 八尾市弓削町3-74-1
TEL (072)920-2225 FAX (072)920-2155

東京 〒101-0062 千代田区神田駿河台2-1 OCCビル517号室
TEL (03)3518-0781 FAX (03)3518-0782

愛知 〒466-0064 名古屋市中区錦3-8-10 愛知労働文化センター2F
TEL (052)731-8111 FAX (052)731-8114

広島 〒731-0103 広島市安佐南区緑井2-21-23 201号
TEL (082)831-1214 FAX (082)877-3961

沖縄 〒901-0156 那覇市田原3-8-1 ユリ香ハウス201号
TEL (098)859-4585 FAX (098)859-4540

東北 〒980-0012 仙台市青葉区錦町1-13-6 エマオ2階E
TEL (022)217-4611 FAX (022)217-6651

毎月、飢餓対策ニュースを皆様にお届けするために、ひばり障害者作業所(八尾市)、生活愛、関西地区のボランティアの皆様が発送作業のご協力をしてくださっています。

ケニアのシーブケア学校では、貧困のために教育の機会を奪われがちな子どもたちが勉強を続けられるよう、食料価格高騰の中でも学校給食を続ける努力をしてきました。日本国際飢餓対策機構では、ハンガーゼロ・アフリカの取り組みの一環として、これまでこの学校給食プログラムを支援してきました。この度この学校が行っている、教育を通しての地域変革の取り組みに協力して、この夏から世界里親会による里子の支援を始めることになりました。この世界里親会の立ち上げのために、1月13日から1ヶ月シーブケア学校を訪問し、準備にあったってきたスタッフの浅野陽子の報告です。



ケニア・シーブケア学校 子どもへの支援準備はじまる！

シーブケア学校は、ナイロビの市街地から15kmほど東にあるソウェト・カヨーレという地区の中にあります。高い失業率と極度の構造的格差のため、地域の人たちは、その日その日を生き延びるのが精一杯という生活を送っています。

このスラム地区に住むパメラさんのお宅を訪ねました。訪問してまず気づいたのは、家の狭さです。6畳ほどのスペースにベッド、テーブル、椅子が入っているので、ドアは半分ほどしか開きません。そこで一家8人が寝起きしています。この長屋には電気や水道の設備はありません。ここではほとんどの家がそうです。パメラさんや地域の人たちは、ジェリーカンと呼んでいるポリタンクを持って、井戸のあるシーブケア学校まで水を買に行きます。家族が多いと、重い水を運んで何度も



パメラさんは6畳程の家に8人暮らし

往復しなければなりません。シーブケア学校では、地域の貧しい人たちのために、市価の1/10の価格で水を提供しています。

もう1人お訪ねしたマーガレットさんは、母子家庭のために生活は更に厳しく、2人の娘さんと共



マーガレットさんの暮らしも厳しい

にトタンでできた家に住んでいます。中学3年生と高校3年生の娘たちは、朝、共同の浴室で体を洗いき替えますが、シャワーはありません。シーブケア学校から買ってきた水をタライに入れて体を洗います。浴室にドアはなく、年ごろの娘さん達は人に見られないよう大急ぎで体を洗います。

□ ■ 一日一食 □ ■

朝食を食べて学校へ来る子どもは、ほとんどいません。干ばつに

よって食料の価格が2～3倍になっているため、食事は1日1食がやっとです。不安定な収入で買えるのは、主食の（※）ウガリとケールの炒め物のみ。毎日毎日同じ食事です。

そんな厳しい暮らしの中で、「一番望むことは何ですか？」という問いに、パメラさん達お母さんは、「子どもたちが良い教育を受けられることです。」と答えておられました。今年もシーブケアから、2人の子どもが全寮制の高校に入学することができました。教科書など必要品は、地域の人たちがみんなで少しずつ工面して揃え、送り出しました。「いつか戻ってきて地域を変える。」そう言ってこの2人は寮へと出発していきました。

この地域の子もたちがしっかりと教育を受け、人々のリーダーとなって自らの力で地域をより良くしていくことができるように私たちも応援しましょう！今夏の支援開始の際には、ぜひ子どもたちの里親となって下さいませようお願いします。

ウガリ…とうもろこしや小麦などの穀物の粉で作った団子のようなもの。
ケール…キャベツの一種で、栄養価の高い野菜。一年中栽培できて収穫量も多い。ケニアではスクマ・ウィキと呼ばれる。



100%電気で走る日産リーフをいち早くタクシーに導入

沖縄県宮古島市平良のタクシー会社、(株)まるちくさんでは、自社の全タクシーにJIFHの募金箱を備え付け、飢餓・貧困に苦しむ方々を支援してくださっています。



下地隆之社長と奥様と娘さん

ECO TAXIでハンガー・ゼロ



下地隆之社長の奥様、康子さんにおたずねしました。

Qタクシーとしてバイオディーゼル車やハイブリッド車を使ってられるのはどうしてですか？

環境に優しいタクシーをめざして、まずエコカーのバイオディーゼル・タクシーを取り入れました。それからハイブリッド車や電気自動車も加えたのですが、バイオディーゼル・タクシーやハイブリッド車を使ったのは日本で最初でした。

Q募金箱をタクシーに備え付け



JIFH募金箱は運転席の前に置かれていました

て下さったきっかけは？

6年前に宮古バプテスト教会の端慶山麗子さんから、こんなのがあるよと教えてもらって、最初は友人や家族で募金箱に募金をしていました。でも社会貢献というなら個人的にやるより、いいことはPRしてみんなで協力し合ってた方がいいんじゃないかと思うようになって、昨年の4月から会社として協力してもらうことになりました。運転手さんも、そんなささいなことが役に立つなら、って細かいお金を入れてくれます。それを見てお客さんも協力してくれるようになりました。

Q今後については

私は、「社会貢献はお金がある人がやればいい」と考えることを疑問に思っていて、1円でも10円でも、家にあるお金を社会に役立てるんだ、とみんな思って欲しいのです。それが良いことだ

とわかっていてもなかなか始められないけれど、小さいことでも実行に移していきたいと思っています。

もう一つは、エコタクシーを広げていきたい。今は他でもハイブリッド・カーを入れ始めています。私たちは、エコアイランド宮古島の、質のいい、お客さんに「選ばれる」タクシー会社になりたいと思っています。

日本で「小銭」と思われるお金が、飢餓・貧困に苦しむ方々にとっては何倍もの価値を持ちます。まるちくさんのような「わたしから始める」取り組み、またさまざまな犠牲を払って支援して下さる方々によって、日本国際飢餓対策機構の活動が支えられ、そして共に生きるときに「世界が変わる」のだと信じます。私たちも数あるNGOの中から「選ばれる団体」になりたいと願います。

編集デスクより



※ NGOのREACH(Reconciliation Evangelism And Christian Healing for RWANDA)地元のNGOで平和のとりくみを行っている団体



参考 ルワンダの和解と平和のために <http://rwanda-wakai.net>



この食品放射能測定器は、人の尿や血液のサンプルで内部被ばく量を計ることもできる。

東北ヘルプ（仙台キリスト教連合） 「放射能測定プロジェクトが始動」

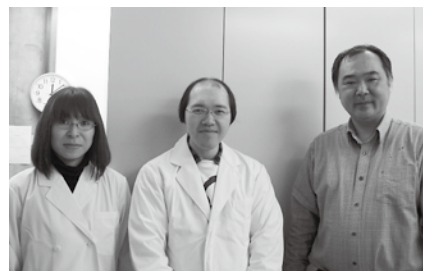
子どもたちへの線量計貸し出しを支援します

放射能計測機を備え、東北大学学生（元核放射能物理専門）、栄養士、ケア

ワーカーの3名が常駐して計測を行っています。放射能の不安は福島県だけではなく広範囲に広がっています。特に子どもを持つ親の心配は大きなもので、そうした声にこたえる意味でもこの計測所の役割に期待が寄せられています。「このプロジェクトは単に食品中の放射能を計測するだけではなく、被災地の人々の不安に向き合おうとする明確な動機を持っています。専門知識をもつスタッフが常駐することで、放射能の身体的な影響とともに、カウンセリングなどで心理的な部分のケアもできればと願っています」と三枝師は語ります。

同計測所では、現時点での被ばく量を知るために、個人用放射線

量計の貸出も始めました。これは、3日間身につけて計測した平均値から年間被ばく量を予想するものです。JIFHはこの取り組みに賛同し、主に子どもたちのため最新の個人用放射線量計10機を支援します。



測定所の常駐スタッフと三枝千洋氏（右端）

未だ解決策の見えない放射能問題。その中で不安を抱える生活者の「いまの被ばくの現状を正確に知りたい」という声に答えようとするこの取り組みが、少しでも被災者を励ますものとなることを願います。

食品計測・個人線量計の貸し出しは、インターネットによる事前予約が必要です。
<http://www.foodbq.com>

東海福音フェローシップ 東北に19回のボランティア派遣

東日本大震災が発生して国内外から多くの方がボランティアとして駆けつけてくださいました。その中に、東海福音フェローシップ（TEF）のメンバーがおられます。TEF地震委員会は東海大地震に備えるべく2003年9月に発足しました。今回の東日本大震災は決して他人事ではないと、3月22日から10月28日までの7ヶ月間、継続的に延べ125名19回のボランティア派遣をしてくださいました。



10数回来てくださった方もあり、被災地域の方々にとって「またあの人が来てくれた」と、復興への励みになっているようでした。

その中のお一人、村山知里さん（写真：右端／知多シオンキリスト教会員）は『震災後の東北の今を、私は現地の人と少しでも一緒に感じたい、共に悲しみ悩み喜んでいきたいと思っています。神様が出会わせてくれた人達に少しでも何かが出来たらと願いながら、私はボランティアを続けています。』と話してくださいました。ここにもまた一つの絆が生まれています。

チームメンバーと共に後列中央に中澤氏



南三陸町志津川に被災者による共同食堂

「さんさカフェ」がオープン

報告：南三陸町を支えるキリスト者ネットワーク 中澤竜生氏

東北大震災における緊急支援で、もっとも早く広く活動されたのはキリスト教団体であったことは被災者の誰もが理解するところです。また、東北の教会が真っ先に援助を受けて近隣に救済が広がったのも大きな証となりました。3月末に、教会のない地域でもっとも状況が過酷な場所は南三陸町と知り、宣教師の方々に私の名刺をもって先に入って頂きました。約1週間の内に電話が入り「志津川に来るように」とのこと、そこから、南三陸町支援が始まったのです。

私のいる仙台から片道約2時間、週に約3回を基本として物資支援と安否の掛け声を行い、時には避難所からの要望で別の避難所の支援に出かけて、避難所と避難

所をつなげる役目にも取り組んできました。また、物資は個人のニーズにあわせてチームで提供しましたので、被災者との信頼関係も築き上げられてきました。今では支援は仮設住宅に移行しましたが、被災者の課題を目の当たりにしてその必要に応える取り組みを続けています。

被災者によるプロジェクト

そんな折、志津川高校避難所の食事を担当していたチームがあります。彼らは被災者でありながら、当初から責任をもって被災者の方々の心のケアを含めて食事奉仕をしてきました。外からのボランティアにも対応し、被災者にも気を配った精神の強いチームです。そのチーム名はM3R-abcといいます。M3R-abcは、仮設後地域のために何かをする必要があると考えて「さんさカフェ」という共同食堂を設立しました。それは志津川の避難所にいた方々への励ましの場であり、コミュニケーションの場でもあります。また各仮設や地域の情報が交換され必要なことを提供する構想の場でもあ



当機構の大工ボランティアらによるロジ工事の様子



「さんさカフェ」
宮城県本吉郡南三陸町志津川廻館101
営業時間10時～18時 定休日 火曜日



ります。

その被災地の灯火でもあるところに、日本国際飢餓対策機構によって外回りのロジがつくられました。プレハブであった外回りは簡素な状況でありましたが、大工さんにより暖かい食堂へと変身しました。実に大変な場所に、ぬくもりある光が一面に照らされたのです。

彼らは私にとって大切な存在です。なぜなら彼らを通して被災者への励ましが可能だからです。彼らは私の誇れるチームでその絆をさらに太くしてくれたのは、日本国際飢餓対策機構です。

南三陸町に行かれる際は是非とも共同食堂「さんさカフェ」へ寄ってみてください。安くておいしい定食があります。そして会話を楽しんでみてください。

「しかし、わたしを通して福音があまねく宣べ伝えられ、すべての民族がそれを聞くようになるために、主はわたしのそばにいて、力づけてくださいました。そして、わたしは獅子の口から救われました。」（聖書）